ソメイヨシノ

ねこぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソメイヨシノ

【Ｎコード】
Ｎ１７４０Ｙ

【作者名】
ねこぜ

【あらすじ】
中学受験に失敗して地元から離れた中学校に行くことになった吉坂春希（しざかはるき）は、入学してから１ヶ月後とあるきっかけでいじめられるようになってしまう。そして春希は、今後の中学生活に悲しみ、怒り、憎しみ、などの沢山の気持ちを抱いたまま、今日も学校へ向かう。自分がそこに存在する理由を持たずに…

プロローグ

夕方、

辺りが時間が経つに連れて薄暗くなっていく。

母親が子供を連れて一緒に歩いていたり、学生のカップルが仲良く手を繋いで歩いていたり、仕事から解放されて疲れた顔をしながら歩いている。

そんな時間。

とある一軒の家、

一人の少年が電気を付けないで薄暗い部屋の中で、何かを呟いている…

ーーーーーーーーーー

「神様、

僕はどのような間違いを犯してしまったのですか？

何故、僕だけこんな酷い目に遭ってしまったのですか？

僕だって努力はしました。　でも、結局どれだけ頑張っても何も変

わりませんでした。
とても辛かったです…
…教えてください
なんでですか？
なんで神様は僕にこんな人生を送らせたんですか！」
涙を流しながら僕は叫んだ。
「でももういいです。
もう何もかも諦めます…
さようなら」
僕は椅子の上に立ち、天井に吊るされた輪が出来た縄で首を締める。
そして……

第1話　悩み（前書き）

はじめまして、ねこぜです。
多忙で更新が遅れるかもしれませんがなんとかやっていきたいと思います！

それでは本編スタートです！

第1話　悩み

僕、吉坂春希（よしざかはるき）。

僕は小学生の時、中学受験に失敗し、行きたかったはずの大明（たいめい）中学に受かれなかった。

大明中学は県内でも有名で偏差値が高く、施設も充実した学校だった。それに名門校にもかかわらず僕の家から意外と近い。

でもそれだから僕が大明中に行きたかった訳ではない、なぜなら受からなかった時に後悔はしなかったからだ。

ただ…小学生の頃とても仲の良かった親友と同じ学校に行けないという事が僕にとっては何よりも悔しかった。
親友はそんな落ち込まないで違う学校でもお互い頑張っていこうと言われたが、やっぱり親友も僕と同じく本当は寂しかったのだと思う。

そして僕の行く学校は、県越えをした都会の八ノ幡（やのはた）中学といった大明中と真逆で、僕の家から電車で一時間掛かり、地元で八ノ幡中に行く生徒は僕しかいないところに行くことになった。くどいようだが本当に僕は八ノ幡中に行きたくない、遠いから面倒くさいとはま

ったく思ってはいないし、後悔も何もしなかった。

ただ、

今後の中学生活で自分は上手くやっていけるのか?、そして一人になってしまわないか?…

それらが僕の唯一の悩みだった。

そんな悩みを抱えたままやがて春休みが終わり、

そして4月3日、入学式

第2話　決意の登校

4月3日　入学式

午前6時半　自宅

天気は雲一つも無く、入学式には絶好の晴れだった。

僕はいつもより早く起き、7時に出る始発の電車に乗るために駅に向かおうとした。

「春希」

家を出る前に声をかけてきたのは母さんだった。

「どうしたの母さん？」

「学校に行く前に聞きたいことがあるの。今日から中学生になるけど、大丈夫？　受験が終わってからずっと元気が無かったけれど…」

母さんはとても心配しながら聞いてきた。

そう。母さんの言う通り、僕の心の中にはいまだに悲しみと、不安が残っていた。

「大丈夫だよ、母さん。今は八ノ幡中に行くのが楽しみで仕方ないくらいだよ」

でも僕は本当の気持ちを言えず、偽りの笑顔で嘘をついた。

「そう…なら良かったわ。てっきりまだあれから落ち込んでたのかと思ってたわ」

「うん。だからもう心配しないでいいよ。」

「あと…入学式に行けなくてごめんなさい。まだ仕事が落ち着いていなくて…」

「そのぐらい仕方ないから平気だよ、帰ったら学校のことたくさん話すからさ。母さんは仕事がんばってね」

「うん。いつも応援してくれてありがとう、春希」

春希はそういえば…、と思い時間を確かめた。

６時４８分……

始発が出るまであと１０分くらい…

「やばっ！　それじゃあもう電車来ちゃうから行くね！」

「そうね、頑張ってらっしゃい。」

僕は母さんに見送られ、そのまま駅へダッシュした。

ーーーーーーーー

午前7時１４分　電車内

…超が付くほどギリギリだった。

ドアが閉まろうとした丁度に僕は電車に駆け込んだ。

まさか初日から遅れそうになるなんて思ってもいなかった…

次からはちゃんと時間を確認するようにしておこう…

今でも少し息切れが続いている。

（僕って体力無いなー…）

しばらく落ち着いてから僕は行く前に家に母さんに言われたことを思い出す。

（受験が終わってからずっとけ元気が無かった、か…）

（ごめん母さん。もうこれ以上心配させたくないんだ……）

今から3年前のことだった。

ある日、僕は欲しかったテレビゲームを買って欲しいと頼んだら父さんに反対されて、そのまま僕は奮発してしまい、喧嘩に繋げてしまった。
あの時僕はたくさんの悪口をぶつけまくり、そしてその度に叱られた。結局最後はお互い何も声をかけ合わず夜が明けた。

でもその時僕は気付かなかったんだ、父さんだってただ怒っているようにも見えたけど本当はとてもショックだったしあの後
は気まずくて声がかけれなかった。僕もそんな気持ちだったからそれだけは断言できる。

だから僕は翌日謝ろうと決めた。

でも…

その次の日、父さんは交通事故で死んだ…

車に撥ねられ、当たり所が悪かったらしくそのまま即死だったそうだ。

その知らせを聞いた僕は混乱して状況がまったく分からなかった。そして、起きたこと全てを理解した僕は、泣いた。とてもショックだった。とにかく泣いて泣いて泣きまくった。

そして僕は思った、あの時もし喧嘩なんてしていないで普通に過ごしていたら、もしかしたら父さんは会社に行く時間が少しずれて事故にも遭わないで済んだかもしれないし、僕のことで心配しないで周囲を気にしていれば事故にも遭わなかったはずだ。だから父さんが死んだのは…僕のせいなんだ…

あの時僕は父さんが死んだ原因を自分だと思い、自分を責めまくった。そして決心したんだ。

『二度と他人に迷惑をかけさせない』と。

……深く考えていたらもう電車は学校の最寄り駅近くまで来ていた。

『次は～、八ノ幡～八ノ幡～　お降りの際は左のドアが開き…』

そしていよいよ電車のアナウンスが車内に流れた。

（もう考えるのはやめよう。）

（そして、今日から始まる中学生活を楽しもう…）

電車が止まる。

少し曲がったネクタイをちゃんと締め、ドア窓越しに薄く見える自分の姿を見て背筋を伸ばす。

そしてドアが開く。

僕は電車から降り、学校へ向かう。

第3話　入学式（前書き）

先週中に出せるって言った奴誰だよ！！
結局一週間経ってるやないかいっｗｗｗｗ
…俺ですごめんなさい遅れてしまいましたｗｗｗ
まあさてさて前置きはここまでとして…
続きをどうぞ！

第3話　入学式

４月３日　７時５２分　八ノ幡中　校門前

校門の前に立っている看板に目を向けた。

八ノ幡中学高等学校　入学式

この学校は小中高一環の学校で、小学校は別の校舎で、中学と高校は同じ校舎の中にある。
だから普通外から入って来る生徒よりも小学校から上がってくる方が多いのだ

（もう今日から昔のことを忘れよう。そして新しい生活を送るんだ）

僕はもう一度背筋を伸ばし、そのまま校舎の中に入った。

入り口前の掲示板で貼り出されたプリントで自分のクラスを確認する。

１年Ｄ組

それが僕のクラスだった。

ーーーーーーー

８時４分　１－Ｄ組　教室内

教室に入るとまだ担任の先生はいなかった。

僕は指定された席に座った。

机の大きさが小学校の机と全く違い、なんだか違和感を感じた。

そして右上に貼られたテープを見る。

『３６番　吉坂　春希』

なんとなく嬉しかった。

席に付いて少し経つと、僕は席のまわりを見てみると、数人の生徒達が仲が良さそうにお互い楽しく話し合っている…

（たぶん八ノ幡小学校からそのまま上がってきた人達なのかな？）

（…だったらいいんだけどなぁ。）

少し僕は疎外感を感じた。

（いや、絶対孤立している…）

（いやいや、そうネガティブに思い込んでも意味なんてない）

「あのー」

（昔からそうだった。僕は昔からよくネガティブ思考が多かったんだよ）

「んっと・・・」

（だからもうやめないと…これはチャンスなんだ…）

「聞こえてるかー？」

（だから…うまくいくはずだ）

「おーい」

（絶対に…）

「えーと名前はっと、吉…坂…？」

（誰かが僕の名前を呼んでたような…）

「吉坂～？」

トントン、と僕の肩を叩いてきた

「えぇっ！？」

僕は驚いて思わず声を上げてしまった。

「うおっ！　ってそんな驚かなくても…」

「ご、ごめん。ちょっと考え事をしてたら急に声をかけられたから…」

「そうだったのか、すまないな～。　ま、まあ何回か呼んだんだけどなぁ、ハハ…」

ん？　最後ぼそっと何か言ったような気がするような…

「そうだ。名前言うの忘れてたよな。オレは桜井順平（さくらいじゅんぺい）。よろしくな」

「あ、うんよろしくね。」

「おう。あ、そういや吉坂って受験で入ったよな？」

「うん、そうだよ」

「やっぱりな～。だってオレ試験会場でお前を見かけたからさ～」

「え？そうだったの？…てことは君もがいしｎ…」

「そう！オレも外進生なんだ」

桜井君はハイテンションですぐに答えた。

「なんかＤ組ってあまり外進生がいないらしいぞ？　確か４分の１くらいしかいないらしいってさ」

４分の１！？　だからこんなに賑やかだったのかな…

「そうなの？　ていうか、どうしてそんなこと知ってるの？」

「そんなの簡単だよ。内進生のやつに聞いただけだよ。ホラ、あいつらだったらさ、誰が新しく入ってきたのか分かるじゃん」

「…え？」
僕は今まで見せたことの無いような驚いた顔をした。
「ん？どうした？」
その時、ガララ…とドアが開くとスーツを着た男性が入って来た。
どうやらこの人が担任の先生のようだ。
「おっと、それじゃあまた後でな」
桜井君は急いで自分の席に戻っていき、最初のＨＲが始まった。
それから担任の先生から挨拶などを聞き、僕は入学式の会場である体育館へ移動した。

ーーーーーーーー

９時３０分　体育館
「えーですから新入生の諸君は…」
壇上で校長先生がずっと話している。
（けっこう長いなあ…）
そう思いながら桜井君が座っている方を見る。

あんまり聞く気がなさそうで今にも寝そうな顔だ。

『内進生のやつに聞いただけだよ。ホラ、あいつらだったらさ、誰が新しく入ってきたのか分かるじゃん』

桜井君、すごいな…

僕と違ってとても前向きな性格だった。

僕もああやってポジティブに生活できたらいいんだけどな…

…なんだか僕も眠気がしてきた。

一度だけ…一度だけ目を閉じよう…

……どうしよう本当に眠いかも

ツンツン…

誰かが僕の肩をつついた。

（…ん？）

僕は目を開けた。

「よ、吉坂くん？　大丈夫？」

「あ…うん、起こしてくれてありがとう。確か…」

「わ、わたし山田秋穂（やまだあきほ）。よ、よろしくお願いします…」

山田さんは下を向いたまま話していた。

「うん、よろしく…」

そして気が付くともう先生の話が終わっていて、入学式は終わりそうだった。

ーーーーーーーー

１１時３０分　１－Ｄ組　教室内

やっと学校が終わった。

（もう家に帰れるけどこれからどうしようか…）

（母さんはまだ仕事で家にいないしな～）

「吉坂～」

桜井君が僕を呼んできた。

「なあ、今から一緒にワクドでメシ食いに行かないか？腹減ってきたしさ」

ワクドナルド（通称ワクド）は、世界中で有名なファストフード店だ。

「え、今から？　いいけど親と行かないの？」

「親？　ああ親なら今日来てないぞ。てかお前んとこは大丈夫なのか？」

「同じだ…　僕のところも今日来てないんだ。」

「…お、奇遇だな。だったらさっさと行こうぜ！俺が奢るからさっ」

今、一瞬だけ桜井君の顔が落ち込んでたような…

「うん、わかった」

でも僕はその事をあまり気にせずそのまま桜井君とワクドで楽しく過ごした。

１９時１５分　帰り道

僕はあの後桜井君と色々と話し、八ノ幡町（やのはたちょう）を案内してもらった。

どうやら桜井君はあの町の周辺に住んでいて小学校は違うところに住んでいたらしい。

だから町についてはとても詳しかった。

その後僕は桜井君と別れ、家に帰った。

快速列車を逃したせいで帰りがすこし遅くなってしまった。

（母さん、心配してないかな？…）

母さんに何も連絡してないからちょっと不安になった。

（夕飯、間に合うといいな…）

周りが暗くなるにつれてそわそわし始めてきた。

「春希？」

「え？」

声をかけて来たのは母さんだった。

それと同時に不安が消えてなんかスッキリした。

「もしかして…まだ帰ってなかったの？」

「うん…ごめん」

「でも…こんな時間まで何してたの？」

「同じクラスで出来た友達と遊んでて…」

「あら、もう友達が出来たの？良かったじゃない」

え？…

友達…トモダチ…ともだ…ち…？

そうだった。すっかり忘れてた。

さっきまで、朝の僕は友達が出来るかどうかとても不安だったんだ…

だけど全然気付いてなかった…

そうだ。

僕に…友達が…出来たんだ…

第４話　連鎖の始まり　前編（前書き）

すみません更新かなり遅れてしまいました…汗

それでは本編をどうぞ

第４話　連鎖の始まり　前編

そうだった。

全く気付かなかった

もう僕に友達が出来たんだ……

「春希？　どうしたの？凄い驚いた顔してるけど…」

母さんが不安げに僕に声をかけてきた。

「う、ううん。なんでもないよ。ちょっと疲れちゃっただけだから」

「まあ仕方ないわよ、入学式だったんだから」

「そうだよね、流石に疲れちゃったよ……」

「帰ったら早く休みなさい。あと、春希の好きな唐揚げ竜田弁当買ってきたわよ。」

そう言って母さんは僕にお弁当の入った袋を見せてきた。

「ホントに！？　ありがとう母さん」

「さ、早く家にかえりましょう。もう暗くなってきてるわよ」

「うん」

僕はなんとかしてその場を誤魔化し、母さんと一緒に家に帰った。

ーーーーーーー

２１時３０分　自室

僕は家に帰ってから大好きな竜田揚げをおいしく頬張った後、シャワーを浴び僕の部屋で今日あった出来事を思い出しながらベットで寝転んでいた。

今日は本当にいろいろとあった。

今思うととてもぞっとする。

僕のような引き気味な性格だから、もしかしたら桜井君とも話せなかったはずだ。

というか、話せる訳が無かった。

それにしてもやっぱり桜井君は凄いな。

入学初日であんなフレンドリーになれるなんて本当に羨ましい。

天井に吊るされた電気をじっと見つめながら考える

少しは桜井君の行動を見習わないとな……

僕は溜まっていた気持ちの整理が終わった後、学校から出されていた課題を進める事にした。

確か入学志願書を提出した日にもらってあったはずだったけど…

というか全く手を付けていないけど大丈夫かな?……

僕は心配し且つ教科書がいっぱい詰まった手提げ袋の中からくしゃくしゃになった課題提出書を見てみる。

課題内容：数学　中学　新・数学？　問題集　Ｐ．２～Ｐ．１４までをノートで終わらせること
　英語　Ｎｅｗ　Ｃｒｏｗｄ　１　Ｌｅｓｓｏｎ１～Ｌｅｓｓｏｎ４　までの単語を覚えること
　国語　中学国語問題集を第一部から第五部までの問題を終わらせること

期限：全教科の課題を始業式当日に回収します。

……え？

開いた口が塞がらないという言葉はこのことだった。

とりあえず、なんとかして終わらせないと……

僕は急いで机に向かい、勉強を始めた。

ーーーーーーーー

４月５日　７時３６分　電車内

結局昨日は課題を終わらせるのに一日を費やしてしまった
まあもっと先に終わらせておけば良かったけど…
結構問題が難しくてちょっと頭を抱えてしまう時もいくつかあって
落ち込む事もあったけれど、終わった時の解放感はとても最高だった。

電車が止まり、ドアから八ノ幡中の制服を着た生徒が入ってきた。

「あれ、山田さん？」

そう、入学式に少しだけ話した山田秋穂（やまだあきほ）さんだった。

「ふぇ？　よ…吉坂くん？」

山田さんは物凄く驚いた顔で返事をした。

「うん、おはよう。山田さんも電車通学だったんだね。」

「はい…吉坂くんもそ…その…電車で学校にきてたんだ…」

山田さんは恥ずかしそうに下を向きながら言った。

……

なんだか会話が途切れてしまった。

それにちょっと気まずいし…

僕たちは何も話すこともなく車内で共に揺られていた。

しばらくすると電車はトンネルの中に入り、車内は少し暗くなった。

そしてトンネルを抜けた瞬間、眩しい光が車窓に降り注いだ。

光と共に僕達の視界にはサクラ色の海が広がった。

とても綺麗だ。

「あ…　ソメイヨシノ……」

山田さんはその桜並木をみてそう呟いた。

「どうしたの？」

僕はなぜだか無性に知りたくなった。

「え？…　ううん、なんでもないよ…」

「ただ…　懐かしいなって」

その時の山田さんの表情は、裏に何か大切な事を隠しているようだった。

7時48分　八ノ幡中　校門付近

あれから結局山田さんにうまく話しかける事ができなかった。

そして気がついたらもう僕達は電車から降りて校門近くまで歩いていた。

「吉坂〜おはようっ！」

大きな声と共に走って来たのは桜井君だった。

「おはよう桜井君」

「おう！　2日振りだな。元気だったか？」

「うーんと…　まあまあ…　かな？〜」

「ほう、って事はお前も昨日宿題やってたんだな〜」

「えっ、なんで分かったの！？」

「まあ〜なんちゅうか男の勘？　ってヤツだな、うん」

「って答えになって無いって！」

「まあそう焦んなって、実は俺も昨日宿題やってたからなんとなくその時の見た目が似てたように見えただけだって」

なんだ…そういうことだったのか

僕は少し安心した。

「んでさ、そのことはもういいんだけどさ、そろそろ隣の相手の事も気にした方がいいんじゃないのか？　」

「え？　隣ってだ……　」

しまった。すっかり山田さんの事を忘れていた。

山田さんは驚いた表情を浮かべながら、顔を赤くしていた。

「あ……」

「ふぇっ！？　そ、その…なんでもあり…ありません！！」

山田さんはいつもよりも高い声を出し、そのまま学校に走り去っていった。

「あ～あ…　やっちまったな」

桜井君は可哀想な子を見るような目で僕を見た。

「あ、う…　うん……」

僕達もそのまま学校に入っていった。

ーーーーーーーー

８時１６分　１年Ｄ組　教室内

教室では何人かの内進生達がまた入学式の時と同じように話し合っていた。

山田さんには気まずくて声を掛ける事が出来なかった。

「まあそう落ち込むなって、な？」

桜井君は僕をなだめていた。

「うん…　大丈夫だよ……」

そして僕は少し落ち込んでいた。

ガララ…

ドアから若くて、黒いスーツを着た担任の先生、藤岡（ふじおか）先生が教室に入ってきた。

「それじゃあ朝のホームルーム始めるぞー」

生徒達みんなは各自席に座り先生の話を聞き始めた。

「今日から中学の授業が始まる。みんな、あまり緊張するな、自信

を持って頑張るんだ。」

自信を持つ…

僕に出来るのかな?…

いや、大丈夫だ。僕になら出来る。

今までの僕とは違うはずだ。

「それじゃあ、朝のホームルームは終わりだ。みんな頑張るんだぞ?」

ホームルームが終わり、生徒達は1時間目の授業の準備をし始めたり、話し合い始めた。

そして僕は決心した。

もう悩まない、前向きに生きると…

第5話　連鎖の始まり　後編

始業式の日から一ヶ月が経った。

だんだんと学校生活にも慣れていき、毎日学校に通うのが楽しくなっていた。

勿論僕は今でもあの時決心した事を忘れていない。

でもあの事件が起きてから、何もかもが目茶苦茶になったんだ…

5月12日　14時13分　ワクドナルド　八ノ幡駅前店

中間考査…

そう、ぼくたちは明後日行われる中学生活初の定期テストを目前としていた。

「あ〜　勉強めんどっ！！　マジで無理だって…」

「仕方ないよ。テストまであと2日しかないんだから、しっかり勉強しないと」

そして僕と桜井君はワクドでテスト勉強をしていた。

「まあそうだけどさ〜…　集中できないっていうか〜…」

「でも結果が悪かったら再試を受けなきゃいけないんだよ？」

「再試？…ってなんだ？」

……桜井君、本当に大丈夫かな？…

ーーーーーーー

5月14日　8時43分　八ノ幡中学校　1年D組　廊下

いよいよテスト本番の日がやって来た…

とりあえず僕が分かる範囲の程度は勉強してきたから何とかなるはずだ。

「よう…吉坂…」

するといつもとは真逆のテンションの桜井君が声を掛けてきた。

「おはよう、桜井君…　ど、どうしたの？…」

「いやさ…　今日のテスト、頑張ろうぜ…　」

「う、うん。頑張ろう」

「おう…　それじゃ俺はもう一度教科書を見直してくるわ…」

「わかった。また後でね…」

桜井君はそのまま自分の席に戻って行った。

一体どうしたんだろう？…　いつもはあんなに元気なのに、今日はおかしい。

僕はそう思いながら席に戻ろうとし、後ろを振り向いた。

すると真後ろには山田さんが立っていた。

「や、山田さん！？　もしかして…さっきから待ってたの？」

「あ、あの…」

すると山田さんは顔を赤くしながら話しかけてきた。

「き…今日のテスト…が、頑張ろうね…　そ、それじゃあ！！」

山田さんはそう言って走り去って行った。

「えっ？　ちょっ　山田さん！？」

僕は呼び止めようとしたけど戻ってこなかった。

山田さんって、本当に恥ずかしがり屋だな…

と、思っているとチャイムが鳴った。

僕も急いで教室に戻った。

－－－－－－－

５月１４日　１５時２０分　１年Ｄ組　教室内

時計の針が４の文字を刺した瞬間、生徒たちみんなは安堵の溜息をついた。

「ここまで！　テスト用紙を回収します。みなさんお疲れ様でした」

そして先生のテスト終了の合図を聞くとみんなが一斉に歓喜を挙げた。

「やっと終わった〜」

「最後の問題ムズくなかった？？」

「おつかれさまー」

「あ〜疲れた〜〜」

「うっしゃあぁぁぁ終わったアアアアア！！！」

みんなが話している中で特に喜んでいたのは桜井君だった。

…というか叫んでいた。

しばらくすると藤原先生が教室に入ってきた。

「帰りのＨＲをやるぞ〜　そこまで長くないから心配するな。もうちょっとの辛抱だ、頑張ろう」

藤原先生は僕たちの気持ちを把握しながらそう言い、ＨＲが始まった。

「みんな、初めての中間考査はどうだったか～？　まだわからないところがあったと思うし何よりも緊張したはずだと思う。だから今日は思いっきり休んでくれ。明日も試験休みだからな。勿論遊んでもいいがほどほどにしとくんだぞ？」

藤原先生は僕たちの事を他の担任の先生よりもずっと心配してくれるとても良い先生だ。

「は～い」

「それじゃあ今日のＨＲはこれで終わりだ。みんなお疲れ様！」

こうして僕たちの波乱の初、中間考査が幕を閉じた。

ーーーーーーーー

５月１７日　１６時２０分　八ノ幡中学校　廊下

テストの結果が無事返却され、通常授業が再び始まった。

僕のテスト結果はそこそこ良かった。成績順位表の２０位に載ることが出来たからもう十分満足だ。

あと驚くことに桜井君の成績順位はなんと7位だった。クラスのみんなもかなり驚き、桜井君に問いかけていたが、桜井君は「運が良かっただけだ」といつものテンションで答えていた。

中間考査の時の桜井君はどうしたんだろう…
聞きたかったけど、あまり気を遣いそうで聞けなかった。
それに山田さんも…
僕はそう思いながら廊下を歩いていた。
すると、
「お、吉坂。丁度いいところに来てくれたな」
途中でばったり会ったのは藤原先生だった。
「先生。どうしたんですか？」
「ああ。今回の中間考査、かなり良かったじゃないか。俺も感心したよ」
「僕…ですか？　でもそこまで良かった訳じゃないし、それに桜井君とかの方がもっと良かったんじゃ…」
「いや、俺は結果を見ているんじゃない、どれだけ頑張ったのかを重視してるんだ。その中で特に頑張ってたのが吉坂、お前なんだ」
え？…
「ほ、本当ですかっ？」
「うん、本当だ。自分でまだ気づいてないかもしれないがそのうち

気づくはずだ。だからもっと自信を持つんだ。お前なら大丈夫」

「はい！　ありがとうございます！！」

「お、いい返事じゃないか、それじゃあまた明日な」

「はい、さようなら！」

僕は先生と会話を終え、荷物を取りに教室に向かった。

自信か…

もう、僕にあるのかな？

－－－－－－－

５月１７日　１６時４５分　八ノ幡中学校　美術室前

帰ろうとおもったけどすっかり忘れていた美術の宿題を提出しに行った。

ガラララ…

「失礼します…」

「…………………」

ドアを開けても中には誰もいなかった。

（いないのかな？　じゃあプリントだけ机に置いてメモも書いておこう…）

ガシャンッ！！

「えっ！？」

美術室の奥の展示室で何かが壊れた大きな音がした。

僕は何があったのか知るため展示室のドアを開けようとしら、中から話し声が聞こえてきた。

「うわっ！」

「やべっ　どうすんだよこれ！？」

「知るかよ！だいたい壊したのは霧島お前じゃねえかよ」

（霧島って霧島君のお兄さんじゃ…）

霧島君は同じクラスメイトで少しヤンキー…って感じの人だ。

噂でお兄さんがいるっていうのは聞いたけど、本当だったんだ…

「あ？お前が押してきたから悪いんだろ？」

（どうやら3人いるのかな？…）

「てかこれって1年の作品じゃね？」

「名前は、んっと　山…田？のだって」

（え？　山田って…　もしかして山田さんの作った物なんじゃ…）

ガタン

（あっ　しまった！）

僕は誤って体制を傾けすぎ、足がドアにぶつかってしまった。

「！？　おい！　誰かいるぞ！」

「誰だ！？」　ガチャ

誰かがドアを思いっきり開け、その人と目が合ってしまった。

「あ…いや…僕は何も…」

「あ？テメエ、今見ただろ？」

「いえ！何も見てないです！」

「嘘ついてんじゃねえよ！」

そういうと霧島という人が僕の腹に殴ってきた。

「ぐっ！…」

痛い…　今まで全く喧嘩なんてしたことがないからとても痛い…

「うわっ　コイツよわ…」

「おいおい止めとけって中1だぞこいつ」

「フン、んなの知るかよ。おい、お前。何組だ？」

「い…いちねん…D…くみ…です…」

「名前は？」

「よ…しざか…です…」

「1年D組って…　この壊れたやつと同じクラスじゃん！」

「おいやべえぞ霧島、バレたら退学だぜ？」

すると霧島が何かを思いついたらしい顔で言ってきた。

「いや、いい事思いついた。　俺の弟にコイツが山田ってヤツの作品を壊したって言いふらさせるんだよ。そしたら俺達は何も関係なくなるぜ？」

「え？…　そ、それって…　僕に罪を擦り付けるんじゃ…　ぐぁっ！」

僕は話している間に「うるせぇ！」と言われ蹴られた。

「ハハハ、コイツおもしれぇな」

霧島の連れの一人が僕を笑った。

「ちょっとしばらくコイツ使わね？」

「あ～それいいじゃん、やろうぜ」

「そういうことだ。分かったな、吉坂？」

もうこの時の僕には選択権なんて無かった。

「は…い…」

「よ～し　それじゃあまた明日な～　行くぞお前ら」

それから僕はしばらく動けなかった。

足がすくんで立てなかった…

明日からどうなっちゃうんだろう？……

分からない。

今は早く家に帰りたい…

早く寝て、今日の事がなかったみたいに忘れたい。

……とても怖い

第5話　連鎖の始まり　後編（後書き）

次回からついに本格的なイジメの始まりです。

春希はこれからどうなっていくのか、物語はどう展開していくのか、

是非ご期待ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1740y/

ソメイヨシノ

2012年1月6日21時47分発行